九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

古辞書と仮名遣い ： 近世の節用集の場合

崎村, 弘文
鹿児島大学講師

https://doi.org/10.15017/10489

出版情報：文獻探究. 12, pp.1-12, 1983-07-20. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

古辞書と仮名遣い

――近世の節用集の場合――

崎村弘文

本稿において筆者は、国語表記史研究の一環として右の問題を取り上げ、具体的資料によりつつ若干の考察を行なってみたいと思うのである。

一

中世から近世にかけ、音韻の混乱に伴なって生じたはずの仮名表記の混乱については、なお、不明の点が少なくない。筆者は、その具体的様相を、古今和歌集関係の抄物（モツ）や御伽草子等の文献に徴して明らかにしたことが有るが[注1]、ここでは、常々「書承性の高さ」[注2]を指摘される文献＝古辞書について、同様の試みを行なってみようと思う。

資料とするのは次の四点であり、明らかにしようとするのは以下の諸点である。

①『篆字節用千金寶』架蔵本[注3]（主資料）
②『倭節用悉皆袋』同[注4]（参考資料）
③『増字永代節用』同[注5]（同）
④『大全早引節用集』同[注6]（同）

(1)古辞書（ここでは、特に①～④の如き近世の節用集）に見える付訓仮名の表記様式は、どのようであるか。
　i．混乱の存否。混乱有りとすれば、その度合い如何。
　ii．書承性の存否。書承性有りとすれば、その度合い如何。
　iii．該様式と当時の仮名遣い書との関係如何。
(2)古辞書（近世の節用集）の性格をめぐり、(1)との関連において論ずべき点は無いか。

【注】

1 本誌6・8・9号の拙稿参照。

2 「先行文献の内容を、ほぼそのままないしそれに近いかたちで受けつぐ傾向。また、その度合い。」を云う。

3 延享二年（一七四五）板。大本一冊、墨付き一〇一丁（首尾数丁を欠く）。辞書本文部鼇頭に「日本國々土産名物尽（にっぽんごくぐにのとさんめいぶつづくし）」「小笠原流書法大概（おがさわらりゅうしょほうたいがい）」等の雑書的記事を付載するが、中に、仮名遣いに関するもの（辞書本文部六六丁裏～七九丁表）が有り、注意を引く。なお、辞書本文は〈改編節用集系陰陽本類〉に属するもので、左記の門立てを持ち、乾坤門が「陰陽（いんやう）。雷（いかづち）。電（いなびかり）。稲妻（いなづま）…」と始まる。

乾坤・神祇・時候（顛倒セル例モアリ。）・官名（官位）・人倫（合シテ官倫or倫名トモ。）・氣形・草木・支躰
・衣食（食服）・器財・言語・數量（顛倒セル例モアリ。）

4 宝暦一二年（一七六二）板。大本一冊、墨付き一六二丁。本文の構成は、①に類する。辞書本文は〈乾本系乾本改編本類〉に属するもので、左記の門立てを持ち、乾坤門が「乾（いぬゐ）。陰陽（いんやう）。一氣（いんき）。雷公（いかづち）。雷（ロ）。…」と始まる。

乾坤・時候・神祇・官位（官名）・人倫・人名・支体（人支）・名字・食服（衣食）・草木・氣形・器財・數量・言語（

言辞）・釈氏（順序ハ、乾坤ガホボ頭位、言語（言辞）ガホボ末位ニ定マル外ハ、変動多シ。）

5　板年不明（『国書総目録』には、天保二年＝一八三一＝板以下三種の板が登載されている）。大本一冊（端本。「ゐ」～「す」「京」の部分のみ存）、墨付き一六七丁。本文の構成は、①②に類する。

6　文化一四年（一八一七）板。中横本一冊、墨付き三四〇丁。雑書的記事のごく少ない本文構成を取る。辞書本文は、〈語形引き類早引節用集類〉に属するものである。

二

資料①に見える付訓仮名の表記様式を体系的に整理して示せば、次のようになる（紙幅の関係上、数値により示し、詳細は別稿に譲る）。

(1)　[dʒi]・[dzu]の表記

i　[dʒi]の表記

「じ」表記

	漢語	和語	総計
○	296 (93.7)	62 (87.3)	
△		2	
×	20 (6.3)	7 (9.9)	
	316	71	387

ただし、連濁形およびそれに準ずるものを除けば、左の如し。

○	203 (92.7)	36 (80)	
△		2	
×	16 (7.3)	7 (15.6)	
	219	45	264

（ナオ、（　）内ノ数字ハ、「その付された例数の、内総計に占める割合。単位％」、以下同様。）

「ぢ」表記

○	60 (93.8)	45 (88.2)	
×	4 (6.3)	6 (11.8)	
	64	51	115

連濁形およびそれに準ずるものを除けば、左の如し。

○	43 (91.5)	42 (87.5)	
×	4 (8.5)	6 (12.5)	
	47	48	95

ii　[dzu]の表記

「ず」表記

○	10	50 (90.9)	
×	0	5 (9.1)	
	10	55	65

連濁形およびそれに準ずるものを除けば、左の如し。

○	5	38 (88.4)	
×	0	5 (11.6)	
	5	43	48

「づ」表記

○	23 (95.8)	163 (98.2)	
×	1 (4.2)	3 (1.8)	
	24	166	190

連濁形およびそれに準ずるものを除けば、左の如し。

○	20	104 (98.1)	
×	0	2 (1.9)	
	20	106	126

(2) [oː]の表記

i. 「aう」「aふ」「aを」表記

本来			
au	681 (88.8)	767	865
ou	56 (7.3)		
eu	30 (3.9)		
au	98	98	
ou	0		
eu	0		

ii. 「oう」「oふ」「oほ」表記 「oを」表記

本来			
au	116 (27.9)	416	495
ou	282 (67.8)		
eu	18 (4.3)		
au	11 (13.9)	79	
ou	68 (86.1)		
eu	0		

iii. 「eう」「eふ」「eを」表記

本来			
au	45 (24.3)	185	189
ou	20 (10.8)		
eu	120 (64.9)		
au	0	4	
ou	0		
eu	4		

(3) [juː]の表記

i. 「iう」「iふ」表記

本来			
iu	83 (55.0)	151	158
juu	68 (45.0)		
iu	7	7	
juu	0		

ii. 「ゆう」「ゆふ」表記

本来			
iu	23 (85.2)	27	41
juu	4 (14.8)		
iu	0	14	
juu	14		

(4) 合拗音の表記

「くハー」「ぐハー」表記　134 (79.3)

「くわー」「ぐわー」表記　35 (20.7)

（なお、「菅丞相（かんしやう〳〵）」「上浣（じやうハん）」の例有り）

(5) 語中尾の[wa][i][u][je][wo]の表記（(2)～(4)に関係するものは算に入れず）

i. [wa]の表記

「わ」表記

本来			
わ	7	9	205
は	2		
わ	38 (19.4)	196	
は	158 (80.6)		

和語「○」例中には、「わー」を

「ハ（は）」表記

本来			
わ	0	0	57
は	0		
わ	3 (5.3)	57	
は	54 (94.7)		

後部成素とする複合語27例を含む。

ii. [i]の表記

「ゐ」表記

本来			
ゐ	12 (42.9)	28	70
い	16 (57.1)		
ひ	0		
ゐ	23 (54.8)	42	
い	2 (4.8)		
ひ	17 (40.5)		

「い」表記

本来			
ゐ	10 (1.2)	815	1061
い	804 (98.7)		
ひ	1 (0.1)		
ゐ	12 (4.9)	246	
い	84 (34.1)		
ひ	150 (61.0)		

漢語「ひ」の項の例は、「油石灰（しつくい）」。なお、和語表記では、「蠅虎（はいとりぐも）」の如く、「へ」と有るべきところを「い」とした例15も存するが、ひとまず右の表には含めなかった。

「ひ」表記

本来			
ゐ	0	0	47
い	0		
ひ	0		
ゐ	0	47	
い	0		
ひ	47		

iii. [u]表記

「う」表記

本来			
う	36	36	50
ふ	0		
う	14	14	
ふ	0		

和語例は、全て複合語の例。

「ふ」表記

本来			
う	0	0	6
ふ	0		
う	0	6	
ふ	6		

「-瓜（ふり）」の複合語例2を含む。

iv. [je]の表記

「ゑ」表記

本来			
ゑ	24 (51.1)	47	59
え	23 (48.9)		
へ	0		
ゑ	3	12	
え	6		
へ	3		

「え」表記

本来			
ゑ	4 (25)	16	33
え	12 (75)		
へ	0		
ゑ	5 (29.4)	17	
え	11 (64.7)		
へ	1 (5.9)		

「へ」表記

本来			
ゑ	0	0	87
え	0		
へ	0		
ゑ	5 (5.7)	87	
え	13 (14.9)		
へ	69 (79.3)		

v. [wo]の表記

「を」表記

本来			
を	7	11	122
お	4		
ほ	0		
を	84 (75.7)	111	
お	9 (8.1)		
ほ	18 (16.2)		

「お」表記

本来			
を	0	3	31
お	3		
ほ	0		
を	8 (28.6)	28	
お	18 (64.3)		
ほ	2 (7.1)		

「ほ」表記

本来			
を	0	1	44
お	1		
ほ	0		
を	9 (20.9)	43	
お	0		
ほ	34 (79.1)		

(6) 語頭の[i][je][wo]の表記

i. [i]の表記

「ゐ」表記

本来			
ゐ	0	0	0
い	0		
ゐ	0	0	
い	0		

「い」表記

本来			
ゐ	6 (13.3)	45	228
い	39 (86.7)		
ゐ	12 (6.6)	183	
い	171 (93.4)		

ii. [je]の表記

「ゑ」表記

本来			
ゑ	6 (25)	24	42
え	18 (75)		
ゑ	3 (16.7)	18	
え	15 (83.3)		

「え」表記

本来			
ゑ	3 (15)	20	39
え	17 (85)		
ゑ	3 (15.8)	19	
え	16 (84.2)		

iii. [wo]の表記

「を」表記

本来			
を	2	11	82
お	9		
を	22 (31.0)	71	
お	49 (69.0)		

「お」表記

本来			
を	2	4	94
お	2		
を	23 (25.6)	90	
お	67 (74.4)		

(7) その他の表記

i. 半濁音の表記

半濁音符「。」を用いるもの　3

〃　を用いないもの　61

（半濁音符を付されていないものが実際に半濁音として発音されていたかどうか、の判断は、『日葡辞書』等の表記例を参考に下した。（また、板木の磨滅による半濁点の脱落といったことは、刷りの状態から見て、ほとんど考えなくて良いものと判断した。））

ii. 「-k入声＋k-」「〃＋F-」の構造を持つ複合語の「-k」の表記

「く」表記　8

「つ」表記　2
（「白駒（はく）」「北闕（ほくけつ）」「北極（ほくきょく）」「勅許（ちょくきょ）」「勅勘（ちょくかん）」「學校（がくこう）」「蜀江（しょくこう）錦（のにしき）」「獨歩（どくほ）」／「竹篦（しっぺい）」「逼迫（ひっぱく）」cf.「-p入声+F-」の「-p」…「つ」表記4、「-t入声+F-」の「-t」…「つ」表記14）

iii・連声の表記

不反映表記　4
（「因縁（いんえん）」「安阿弥（あんあみ）」「安穏（あんをん）」「雪隠（せついん）」）

以上、いずれも、のべ例数を示すが、これにより次のように云うことができる。

資料①に見える付訓仮名の表記様式は、左の如き特徴を持つ。即ち、いわゆる歴史的仮名遣いに照らして、全般に若干の混乱を有するが、

(1) [dʒi] [dzu] の表記については、本来の区別（四つ仮名の区別）が、90%前後の割合いで保たれている。

(2) [oː] の表記については、本来の区別（オ段長音の開合をめぐる表記区別）が70〜80%の割合いで保たれている。（本来の表記を保つ割合い…漢語に関して、au系 681/842 (80.9)、ou系 282/358 (78.8)、eu系 120/168 (71.4)。和語に関して、au系 98/109 (89.9)、ou系 68/68 (100)、eu系 4/4。）

一方、

(3) [juː] の表記については、和語のそれに関してなお本来の区別（iu連母音・ウ段拗長音をめぐる表記区別）が保たれているものの、漢語のそれに関しては区別が失なわれ、概ね「iう」「iふ」表記に依る傾向が見える。

(4) 語中尾の [wa] [i] [u] [je] [wo] の表記については、本来の区別が失なわれ、和語のそれには「わ・い・ふ・へ・を」を、漢語のそれには「わ・い・う・ゑ・を」を当てる傾向が有る（左表参照）。

和語	漢語	語種／表記	発音
38/40 (95)	7/7	わ	[wa]
54/212 (25.5)	0/2	は	
23/35 (65.7)	12/22 (54.5)	ゐ	[i]
84/86 (97.7)	804/820 (98.0)	い	
47/214 (22.0)	—	ひ	
—	36/36 (100)	う	[u]
6/6	—	ふ	
3/13 (23.1)	24/28 (85.7)	ゑ	[je]
11/30 (36.7)	12/35 (34.3)	え	
69/73 (94.5)	—	へ	
84/101 (83.2)	7/7	を	[wo]
18/27 (66.7)	3/8	お	
34/54 (63.0)	—	ほ	

※本来の表記を保つ割合いを例数・百分率にて示す。

※漢語「わ」「は」「ゐ」「う」「ゑ」「え」「を」「お」の欄には、「複合語中、後部成素の頭部がそれらの仮名により表記されるもの（ex.「茶碗（ちゃわん）」…）」の例数を示す。「は」の欄の2例は、「一把（いちわ）」「琵琶（びわ）」。

※同「い」の欄には、同例数と「複合語中、前部成素の末尾・後部成素の末部の一方or双方がそれにより表記されるもの（ex.「拝殿（はいでん）」「芳名（ほうめい）」「佩帯（はいたい）」…）」の例数とを併せ示す。

※漢語「う」欄・和語「ふ」欄の例数は、(2)関係の語例を含めればはるかに多くなるが、百分率にはほとんど影響が無い。なお、漢語「ふ」欄が空いているのは、-p入声なども「う（or つ）」に表記されて、該当例が無いためである。

※和語「い」欄の例数には、「複合語中、後部成素の初頭が「い」で表記されるもの」の例数39を含む。これを除けば、同欄の数字は「45/47 (95.7)」。

(5) 語頭の [i] [je] [wo] の表記についても本来の区別が失なわれ、和語・漢語とも、「い」・「ゑ」or「え」便宜・「を」or「お」便宜の表記に依る。

(6) 合拗音の表記には「くハー」「ぐハー」を当てる傾向が強い。

三

資料②〜④に見える付訓仮名の表記様式については、いまだ、詳

細な調査結果を得ていないが、概ね次のように云えそうである。

。資料①および②〜④は、所収語彙の量・内容において大きく相違するにもかかわらず、その付訓仮名の表記様式については共通する点が少なくない。例えば、右に挙げた(4)〜(6)の事項はほぼそのままに、また(1)〜(3)の事項も若干の程度の差は有るものの、資料②〜④に共通に認められる[注1]。

。その背景には、㋑日常頻出・必須の語の表記が資料①〜④を通じてほぼ同一であること、㋺各資料独自の所収語＝〈増補〉語等＝も、多くは、それら頻出・必須の語と構成要素ならびにその表記を同じくするものであること、等の事実が有る。

また、

。資料③④には、語の表記と検索の問題に関わる次のような注記が有る。

資料③…「てうでうハ／此部ちやう／じやうハちの部／しの部に出」（「て」部の末）

「じ。じうの／類は此部／ぢ。ぢうでう／等の類は／ちての部ニ入」（「し」部の末）

このほか、類似の注記＝開合表記に関するもの＝が「く・や・ま・こ・あ・き・め・ひ・も・せ」部の末に有る。

「ゆふの類爰／に出スいうは／いの部にあり」（「ゆ」部の末）

「此仮名に屬する字口の(い)に摂め其かなを分ちてこれをしらしむ／[お][衰]のかなも同しく口の(を)口の(え)に摂むかなに古今のたがひある／ものハ右ニ古かなを付し左に今かなをしるす左なきハ古今通用のものとしるべし」（「ゐ」の部）

資料④…「音かなづかひの取ちがひやすき／字大畧をしるす／光　香　蠟燭／相續　箒　石榴／此類ハ両方を見るべし」（冒頭「文字引様」の項）

「…かなちがひにて(ら)に入べき字…蠟燭……」（「ろ」部・「四」。「蠟燭」以下の語は、「ら」部にも掲げられている）

このほか、右「かなちがひにて…」と同様の注記＝開合表記に関するもの＝が「は・と・を・よ・そ・こ」部に有る。

これらのことから推察するに、近世中期以降に成立した節用集は、その付訓仮名の表記様式の大方をそれ以前のものから引き継いだ結果、常に、引きにくさの問題をかかえていたものと思われる。

引き継がれた表記様式は一種の規範として尊重され、やみくもに改められることは無かったようであるから、利用者の側は、〈オ段長音の開合〉や〈iu連母音・拗長音〉〈四つ仮名〉等の区別に関係するところの有る語を検索するのに、再三頭を悩ましたものと思われる。それでは日常事務用の辞書として機能性に欠けること明白であるから、利用者がより引きやすいものを望むのは当然のなりゆきである。検索の便に関する注記を欠いた資料①②の段階から、配慮の跡が窺える③④の各段階へと変化が見られるのは、辞書編纂者・出板者の側が次第にそうした利用者の要望――ないし消費動向――に応えて行った結果であると思われる。

近世の節用集は、表記の面でもより引きやすい形へと進化を遂げて行った、と云って良いように思う。

【注】

1　古今和歌集関係抄物・傍訓注記の表記様式と比較した場合、(3)(6)の事項は共通するが、その他については若干異なった様相が

認められる。(1)(2)については、むしろ、節用集の場合よりも混乱の進んだ様相を呈するようである（以上、本誌6号の拙稿参照）。

四

ところで、資料①には、稿末に示すような仮名遣い関係の記事が見られる。

これは、その末尾にも云う如く、水谷（溪）居秀の著作（『假名遣秘解』）より引いたものであるが、これと前に示した同資料の付訓仮名の表記様式との関係について触れて置きたいと思う。

同記事には、次のような仮名遣い原理が示されている。

い…漢語の語中尾／和語の語頭・和語の語中尾の一部（具体例として四段活用動詞連用音便形・形容詞連体音便形を示す）

ゐ…一字表記の漢語・漢語の語頭の一部（撥音韻尾を持つ漢語の語頭）／一字表記の和語の多く・和語の語中尾の一部（語形変化無き＊1和語の語中尾）・「井＊2」

ひ…（漢語には用いず）／和語の語中尾の一部（具体例として八行四段活用動詞連用形ならびに語形変化無き語多数＝昔よりのならハしにて書＝を示す）

ほ…地名人名表記に用いられる真仮名「保」／和語の語中尾の一部（撥音韻尾を持つ漢語の〈訓み〉の――＝ただし例外有り＝その他）

を…（漢語についての記述は見えず）／「小」（アクセントによる仮名遣い原理を説く＊3）・「緒」「音」・和語の語頭の一部（習のある事なり）・和語の語中尾の大多数・（このほか、「織」「尾」「桶」等の語の仮名遣いが、語の複合次第で変わること・それがアクセントの違いを反映した使い分けであること、等が述べられる）

お…（漢語の語中尾には用いない）／「大」（アクセントによる仮名遣い原理を説く＊3）・和語の語頭の大多数（ただし、アクセントの違いにより間々「を」を書く例有り＊4）

へ…（漢語についての記述は見えず）／和語の語中尾の一部（具体例として八行四段活用・同下二段活用の動詞、また、ならハしにて書ものを示す）・助詞「へ」・（このほか、「聲」などの表記には「へ」を用いるべきであるが、字の続き具合いが良くないので「ゑ」を用いること等が述べられる）

え…漢語の語頭の大多数／一字表記の和語・和語の語頭の一部・和語の語中尾の一部（具体例としてヤ行下二段活用動詞＝八行・ウ行より転じたもののうち、八行・ウ行たることを推測させる要素を持たないものを含む＝を示す）

ゑ…一字表記の漢語・漢語の語頭の一部／和語の語頭の一部・和語の語中尾の一部（語形変化無き和語の語中尾）

は＊5…（漢語についての記述見えず）／和語の語中尾（和語の語中尾には「わ」を用いない）・（このほか、語頭の[wa]を「は」で表記してはならないことが述べられる）

ふ…〈入聲字〉／「生」・和語の語中尾（オ段長音・ウ段拗長音関係の和語の語中尾）

ふ…（漢語についての記述見えず）／和語の語中尾（「仰（あふぐ）」「葵上（あふひのうへ）」等特殊な例を示すが、また、前項に入るべき例をも示す）

へ…（漢語についての記述見えず）／和語の語中尾（語中尾の[me]を表記する「へ」）

ふ…（漢語についての記述見えず）／和語の語中尾（語中尾の[mu]を表記する「ふ」）

＊1 ここに云う語形変化は、動詞・形容詞の活用のほか、名詞の露出形・被覆形の交替等かなり広い内容を持つものである。

＊2 暗誦要語として挙げるものであろう。この記述中に〈ならハしにて書〉として挙げられたものも、そうした性格を色濃く持つものと思われる。

＊3 該原理をやや誤解しているふしが有る。

＊4 アクセントによる「お」「を」使い分けの原理について述べたものであろうが、十分に理解し得ていないふしが有る。

＊5 以下の項目は、「読み方についての解説」というかたちを

取っているが、また同時に、「表記に心すべき暗誦要語一覧」といった性格をも具えたものであろう。

これと、第二節に示した資料①の付訓仮名の表記様式とを比較してみると、次のようなことが指摘できる。「い」「ゐ」「ひ」「ほ」「を（語中）」「へ」「え（漢語）」「ふ（和語）」「へ」「ふ」の用法は、ほぼ一致するが、「を（語頭）」「お（同）」「え（和語）」「ゑ」「は」「ふ（漢語）」の用法にはかなりの相違が見られる。

これをどのように評価するか――資料①は『仮名遣秘解』を引いて雑書的記事の豊富さを示したばかりでなく、また実際、それを付訓仮名の表記に利用した、と見るか否か――なかなか難しいところであるが、現在のところ、筆者は、「『秘解』の影響したところが全く無かったとは云えないが、有ったとしても、その範囲はかなり狭かろう」と考えている。

その根拠としては、『秘解』刊行以前に成立した辞書中に、やはり資料①と同様の表記様式を持つもの（現在、詳しく分析中）が有ることを挙げて置けば十分であろう。問題は、むしろ、『秘解』の表記法と辞書のそれとの共通性がどのような事情によって生じて来たか、という点に有ると思うのである。これについては、今後なお検討して行きたいと思う。

五

以上のことから、本稿冒頭に示した(1)(2)について次のように云うことができる。

(1)資料①～④の如き近世の節用集に見える付訓仮名の表記様式は、第二・三節に示す通りで、

i、『日葡辞書』式の表記体系を基準に考えれば、若干の混乱有りとしなければならないものの、その度合いは、古今和歌集関係抄物に見える傍訓仮名表記の混乱度よりも小さい。

ii、その背景にはやはり書承性が有るものと認められるが、それがどの程度のものかは、現在のところ明確にしがたい。

iii、そうした表記様式と当代の仮名遣い書の記述内容との間に少なからぬ共通点の有ることは確かであるが、それがどういった事情によるものであるのか、なお検討を要する（第四節参照）。

(2)それらの節用集は、音韻の混乱（および表記の混乱）によって生じた引きにくさの問題を、表記方法の改善によって乗り越え（ようとし）た。

――鹿児島大学講師――

※以下に、資料①所引仮名遣い関係記事の翻字を示す。参照されたい。

假名づかひ目録

一 端のいの事
一 中のゐの事
一 奥のひの事
右いゐひの三字ミな口ニてよむ時ハひとつにいとなゆる是によりておの〱書ちがゆる事也故に其わけを註ス
一 端のほの事
一 中のをの事
一 奥のおの事
右同断
一 端のへよこ（へ共）の事
一 中のえちゝミえ（ともいふ）の事
一 奥のゑの事
右同断

（以上九項ノ「の」ノ字体、上ノソレハ全テ「乃」ナレド、下ノソレハ、初三項ニテ「し」、中三項ニテ「の」、後三項ニテ「れ」ナリ。各項内容ノ関連ヲ示唆センガタメノ作為ナラン。）

66ウ

一 はの字わとよむ事
一 ふの字うとよむ事
一 ひの字いとよむ事
一 への字ゑとよむ事
一 ほの字をとよむ事
一 をとよむふの字の事
一 めとよむへの字の事
一 むとよむふの字の事

端のい
端のいハ音の時にいづれも字の下に用る也

性。命。敬。栄。禮。悔。來。等の類なり
又訓の時字頭にハ皆〱端のいを用る也 今。射。單。至。勇。息。否。諌。輸。等の類也
又訓の時中に用るの例には 凌。縦。排。蔑。粉 等のたくひ尤まぎれ安し
又字の下に用る例にハ 好。悪。旨。辛。苦。酸。痛。等の類也
右の例を吟味して此外を知るべし

67オ

○中のゐの事
中のゐハ音に用る例には位。意。威。違。伊。圍。委。等の類ひなり
又はね字の音ハ惣て中のゐを用る事也 陰。院。印。音。因。匂。湮。婬。飲。のたぐひ也
又訓の時字の中下に用るは大やう何れにも（但しやゐゆえの通ひハ用さるなり）通ハぬ時に遣ふ例也

67ウ

竟。新枕。水鶏。初冠。位。紅。飯。胡簶。宿直 額。次。頷。愁。魂。魄。山 藍。椎。紫
又一字訓の時多ハゐの字なり 猪 伏猪 亥子 集 群居 氷居 起居 などの類なり
又井の字も中のゐなり 三井寺 大井川 井手里 雲井 飛鳥井 かゐの類也

○奥のひ
おくのひハ音の時用る事なし 訓の時に大方ひふへの三字と通ふ時に書事也

勢（いきほひ いきほふ いきほへ） 伴（ともなひ ともなふ ともなへ）
順（したかひ したかふ したかへ） 逢（あひ あふ あへ） 爭（あらそひ あらそふ あらそへ）
煩（わつらひ わつらふ わつらへ） 飼（かひ かふ かへ）
掩（おほひ おほふ おほへ） 償（つくなひ つくなふ つくなへ） 拾（ひろひ ひろふ ひろへ）
徘徊（やすらひ やすらふ やすらへ） 誘引（さそひ さそふ さそへ）
違（たがひ たがふ たがひ（ママ）） 救（すくひ すくふ すくへ） 問（とひ とふ とへ）
通（かよひ かよふ かよへ） 思（おもひ おもふ おもへ） 匂（にほひ にほふ にほへ）
喩（たとひ たとふ たとへ） 酬（たとひ たとふ たとへ） 呪（のろひ のろふ のろへ）
擔（になひ になふ になへ） 類（たくひ たくふ たくへ） 負（おひ おふ おへ）

68オ

向（むかひ むかふ むかへ） 這（はひ はふ はへ） 棄（うはひ うはふ うはへ） などの類なり
又訓の時なにのかよひもなけれども昔よりのならハしにて書侍る
およそ其例をあげバ 相。互。愁。基。際。或。平。間。脊。葵。驚。齢。翼。災。額。領。肘。晩。鐘。弥生 昨日 兄君。甥 姪の類數多あり（口傳）

68ウ

○端のほ
はしのほハ本字に保の字を書たるハ勿論保ほ同し事なれば上よりのうつりにてをとよむなり
松保浦口にハまつをのうらと云 伊
香保沼（ゐかをのぬま）とよむなり
仁保海（にをのうミと口にはとなふる也）
佐保姫（さをひめと吟ず）の類
なり又ほの字を書てをとよむ事ハ音のはねてよむ字は大やうほの字を書てをとよむなり 竿。焰。潤。掩。郡。庵。薫。廉。塩

69オ

厳。亶。漫。妍。顔
のたぐひなり
又はね字にあらね共
ほの字を書事は
香。催。競。粧。勢。比。
仰。公。人王。大政大臣
正親町。大納言。閣。覆
垣生。花萎。打龍鐘。
69ウ
などの類なり
又案にはね字なれど
も訓母によりて子字
にをの字書事あり
たとへバ鰹遠などの
類也よく〱思索すべし

○中のを
中のをハ軽き字なり
故に小文字を本字に
書たるは皆ゝ中の
をなり
小手巻。小島。小忌袖。
小比叡。小倉山。小船
小塩山。小車。玉小柳
小鹿（但男鹿ハおしかせ）小河
70オ
小田守。小山。小指。指の字ハ
本訓をよび也それを上
没してよびなり常にハ
よをゆへ三五相通の類
してゆびと云
なり

又緒の字何の緒にても
皆をのかななり
琴緒玉緒袋緒鷹
經緒緒絶橋の類也
又音の字も中のを也
音無川音信鐘音
鞠杳音水音川音
の類也
又自。己各恐押
置追教穩逡棘
居躍補遅後起
奥宥叔父叔母
70ウ
姪。落。終。奢。怠。劣
などの類いづれも上
にかく時なれども
中のを書ハ習のある
事なり
又字の下に書ハ多
ぶん中のをなり十。魚。
などの類わづらハし
く出し侍らず
案に幼稚の字を或
抄におさなきものと
書は訛なり中のを成
べし又男の字もをのこ
と書時ハ中のをなりおと
こと云時ハ奥のおなり

71オ
男山などの類なり
又織の字も只織おる
とばかりハ奥のおにて
錦織織姫などいふ時
は中のをなり
又尾の字ハ本奥のお
なり故に尾張と云時ハ
おはりと書なりされど
尾張國と申時ハ自然と
尾の字上聲になる故
をハりのくにと書事也
又桶の字ハおけ也是も
小桶と云時ハおのかな上
聲に成て来る故にかな
に書時ハこをけと書也
かやうのちがひ有て中
のを奥のお分別有事也
71ウ
○奥のお
奥のおハ重し故に
本字に大文字を書た
るは皆奥のおなり
大宮大埜大沢大
内大政大臣。或人
問て云大政大臣大納言
のおほいの假名に端
のいをかく叓ハいかなる
仔細か有世の書を見

るに皆ひの字又ハ井
の字を書て有之と
答云是ハおほきおほく
など丶通ひ有ゆへいの
字よろし
又或抄に机。教。女。
72オ
推量などのをに奥ノ
お書ハ誤なりいづれも
中のをしかるべし惣て
上に書假名ハ多分ハ奥
のおなれども間にハ
中のを書侍るハ皆平
上去三聲のたがひ有て
かわる事なり知ル人罕也
又思惜行拝覆
負面奥翁長同
夥泳朧愛驚
境荻笑在落魄
正親司　折々時々
などの類皆此おなり
又尾上。松尾。虎尾。馬尾。
山鳥尾垂尾。美濃尾山。
72ウ
是は尾の字元来
奥のおなる故なり　など
の類いか程も有皆同じ
又音の時字の下ニ奥
のお書事ハなし

○端のへ

端（はし）のへハひふへの三字に
かよふハ皆用ゆ
敬（うやまへる うやまふ うやまひ）　養（やしなへる やしなふ やしなひ）
弔（ママ）（とふらへる とふらふ とふらひ）　繕（つくろへる つくろふ つくろひ）
賑（にぎハへる にぎハふ にぎハひ）　矯（ためらへる ためらふ ためらひ）
失（ママ）（うしなへる うしなふ うしなひ）　窄（さすらへる さすらふ さすらひ）
祝（いはへる いはふ いはひ）　倡（いざなへる いざなふ いざなひ）
准（なぞらへる なぞらふ なぞらひ）　移（うつろへる うつろふ うつろひ）
纉（まがへる まがふ まがひ）　拂（はらへる はらふ はらひ）
などの類也
又此外にふへに通（かよ）ふて
ひを除（のぞき）たるも有

73オ

更（かへ かふる）計（かぞへ かぞふる）　植（うへ うふる）
緒（はへ はふる）　袖はへてをりはへて ふりはへて意ばへ
押（をさへ をさふる）　仕（つかへ つかふる）　堪（たへ たふる）
存命（なからへ（ママ） ながらふ）　加（くハへ くハふる）　唱（となへ となふる）
弁（ワきまへ ワきまふる）　答（こたへ こたふる）　交（まじへ まじふる）
貯（たくハへ たくハふ（ママ））　栄（さかへ さかふる）　支（さゝへ さゝふる）
備（そなへ そなふる）　調（とゝのへ とゝのふ（ママ））　扣（ひかへ ひかふる）
拘（かゝへ かゝふる）　迎（むかへ むかふる）　勘（かんがへ かんがふる）
捕（とらへ とらふる）　踏（ふまへ ふまふる）　訴（うつたへ うつたふる）
教（をしへ をしふる）　などの類なり
又何のかよひもなき
字なれ共ならハしにて
書侍（かきはべ）る
偏（ひとへ）歸（かへる）古（いにしへ）妙（たへ）敢（あへて）囀（さへづる）
諾（いらへ）剰（あまさへ）苗（なへ）後（しりへ）扣（ひかへ）肌（つくへ）（ママ）

73ウ

故（ゆへ）悶（もだへ）無敢（あへなく）白妙（しろたへ）堪（たへ）
兼（かね）一重（ひとへ）二重（ふたへ）九重（こゝのへ）
の類又ハ都（みやこ）へ東（ひがし）へどこへ
かしこへなどの時も端（はし）
のへなり蓋（けだし）かれこれ
かけるかなに字（じ）なり
わろきもあれバ端（はし）のへ
中の江奥（をく）のゑなど
おもひの外にかける
事も有なり熟（うま）く
味（あぢわ）ふべし
又案（あんずる）に声（こへ）の字古來（こらい）
こゑと書（かく）はいぶかし
いかにといふにはひふへ
ほの五音（ごいん）に通（かよ）ハせ見る
に聲色（こハいろ）聲音（こハね）聲高（こハだか）
など、申なり然れば
五音（ごいん）にかたよりて
はに通（かよ）ひ侍（はべ）るなれバ
への字（じ）書（かく）べき事なり
さりながら上（かミ）よりの
つゞきにて字形（じなり）の
よからぬところなどハ
用捨（ようしや）すべし世間（せけん）す
べてゑの字を用ひ來
れり
又上（うへ）の字（じ）もかなにむ

74オ

かしよりうゑと書て
疑（うたが）ふ事なし予おもふ
にへの字なるべし五（こ）（ママ）
音（いん）に通（かよ）ハせ見る時上皮（うハかハ）
上手（うハて）上頬（うハつら）など、申也
然れバはの通（かよ）ひ侍（はべ）
るゆへにおそらくハ
端（はし）のへならむ尾上（おのへ）
などの時も勿論（もちろん）也

74ウ

○中（なか）のえ
中（なか）のえハ輕（かろ）し故（かるがゆへ）に
訓（よミ）の時たぶんやゐ
ゆえよの五音（ごいん）に通（つう）
じてゆえ〱と通（かよ）ふ
字（じ）ハ皆（ミな）中（なか）のえなり
越（こえ こゆる）消（きえ きゆる）見（ミえ ミゆる）
聞（きこえ きこゆる）　絶（たえ たゆる）　燃（もえ もゆる）
覚（おぼえ おぼゆる）　寒（こゞえ こゞゆる）　愈（いえ いゆる）
肥（こえ こゆる）　萠（もえ もゆる）　などの
類なり
又字頭（じがしら）には
榎木（ゑのき）（ママ）枝（ゑだ）（ママ）撰（ゑらぶ）（ママ）の類也
又一字假名（かな）には
得（え）柄（え）などの類なり
又音（こえ）の時は
縁（えん）の字（じ）などの類あま
た有事也女の文などに

75オ

ゑにし御ゑんなど書
事あししえにし御えん
など、書べし案（あんずる）に
此かんな紛（まぎ）る、事多し
或ハ答（こたえ こたゆる）などはや
ゐゆえよのひゞきにて
中のえ也又備（そなえ そなゆる）
植（うえ うゆる）なれども備（そなえ そなハる）
植（うふる うハる）など、はひふへ
のひゞきにて備（そなへ）植
うへると端（はし）のへを書べし
又唱（となゆる）の字もとなふ
となへてとふへの通ひ侍
れば端（はし）のへ也此類あ
またあり又或抄（あるせう）に
笛（ゑふ）の字ふえと書は
誤（あやまり）なり

75ウ

○奥（をく）のゑ
奥のゑハ重（おも）し故（ゆへ）に
中（なか）のゐを書と同し
意（こゝろ）にて訓（よミ）に用る時字
の下にひゞきあまたに
通（かよ）ハぬ時大方此ゑを
つかふ贄（にゑ）杖（つゑ）笛（ふゑ）梢（こずゑ）
末（すゑ）向後（ゆくすゑ）の類也案（あん）に
前（まへ）後（しりへ）の字などまへ
しりへとあまたに通

76オ

ひなきに書は習ひ
ある事なり
又字頭にハ笑笑顔
などの類也
又音の時一字假名
にハ會惠繪衛の類也
案に衛の字女の文
などに左へもん右ひやうえ
など〻書事あしし
左ゑもん右ひやうゑなど
と書べしかやうの事
平日のたしなみか
又音の二字假名にハ
映越園栄猨猴
烏帽子の類

76ウ

○はの字わ（原文「わ」）わ（原文「て」）によむ事
はの字ハ字の中下に
用る也障。哀。弱。強。
偏。兵。沫。川。庭。など
の類假名にハはと書
て口にハわと吟ずる也
此類あまねく挙る
に及ず必文字の中
下にわ（原文「わ」）わ（原文「て」）を書べからず
去ながら是に紛るゝこと
多し考べし
又字頭にわと申時ハ
必は（原文「む」）は（原文「ば」）の字をかく事な
かれ尚下に委し

○ふの字うによむ事
是ハたぶん生の字を

77オ

本字に書たるハふを
書てうと吟ずる也
芋生浦。武隈生松。
芹生里。苅生。丹生。
園生。枯生。蒲生。栗
生。垣生。峯生松など
の類なり　案に或
人前に出せし垣生の
かんなをうたかひてかき
をにても有べきかと云
へり予が云此垣生の
かなにて前とてらし
合せて見るべしはひ
ふへほの五音通ふゆへ
垣生垣生のかな
に極るといへば或人較（ママ）

77ウ

まどひを解けり
又其外にも引て吟
ずるはふの字なり
祝子近江昨日今日
大夫。扇。棟。鴟。賓。
蜻蛉。申。行違。最
愛などの類假名
にはふと書て口にハ
うと吟ずる也まだ此
外にも唱備喩など
は前にも出せる通
はひふへほの五音に
かよふ故ふの字をかく
事ハ勿論なり
又音に入聲字を別
て唱ふる時ハふの字

78オ

を書事也
堂塔。法師。蠟燭。
貧乏。索麺。（世間索の字を素に書は）あやまちの類也案るに
堂塔だうたふと書
べし塔中など云ゆへ
ゆめ〳〵どうたうなど
書べからず又法師など
も吟味する上からは
はふしと書べしいか
にとなれば法度法眷
など云時ハ法の字はつ
の声なりほつとほつ
けんとハ云ず然れば
はふし成べしされ
どもものによりて字
なりわろき故ほうし
とも書べきなり

○をによむふの字の事
仰。願。扇。葵上など
の類なり

○めによむへの字の事
押並。女郎花。露汎。
崇などの類なり
右の二條毎字ある
事なりよく〳〵味ふべし

○むによむふの字の事
頗。蒙。浮。荒。撰。嘯（ママ）
戯。油。煙。訪。傾。睡（ママ）
士。哀。憐（ママ）などの類也

右ハ水谷居秀の撰ぶ処
の假名ヅかひ諸抄の及
バざる好書なり